

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18530546
 研究課題名（和文）長期入院の統合失調症患者における改善・増悪指標の臨床心理学的検討
 研究課題名（英文） A Clinical Psychological Study for Deteriorative and improvement Signs on Long-stayed Inpatients with Schizophrenia
 研究代表者
 横田 正夫（YOKOTA MASAO）
 日本大学・文理学部・教授
 研究者番号：20240195

研究成果の概要：長期入院の統合失調症患者において心理テストを使用し静穏化の起こる 10 年を目安とし、10 年の経過を検討した。その結果、統合失調症患者では、10 年後になると、描画特徴における活動性が低下し、整合性が増加した。また、診療録、看護記録からの情報を描画特徴と関連させて症例を検討してみると、改善指標としては、描画の断片化が空間構成のあるものへ変化すること、増悪指標としては空間構成が貧困化することと考えられた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1200000	0	1200000
2007 年度	1100000	330000	1430000
2008 年度	1100000	330000	1430000
年度			
年度			
総計	3400000	660000	4060000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：統合失調症、長期入院、増悪指標、改善指標

1. 研究開始当初の背景

これまでほぼ 10 年にわたって心理テストを定期的実施してきた。実施者の延べ人数は 371 名となった。これらの内訳をみると、心理テストの実施回数は 1 回が 118 名、2 回が 55 名、3 回が 32 名、4 回が 37 名、5 回が 24 名、6 回が 18 名、7 回

が 24 名、8 回が 18 名、9 回が 13 名、10 回以上が 32 名であった。この数字が示すことは、多くのものが心理テストを 1 回だけ受けているということである。つまり多くの患者は比較的速やかに退院するので 2 回目以降の心理テストを受ける機会がない。しか

し、場合によっては、入退院を繰り返すものが多い一方で入院が長期化してゆくものも多い。10回以上心理テストを受けた者の人数は全体の8.6%であった。

こうした心理テストの集計はあるものの10年間にわたってその結果を検討したものは見当たらない。長期経過について心理テストで追跡することは、臨床心理学的に価値の高いものと考えられた。

2. 研究の目的

静穏化の起こるといふ10年をひとつの目安とし、10年間以上の間隔で、心理テストのひとつ描画テストが得られているものについて、2つの時期で変化がみられるかどうか検討することにした。また、10年経過したものについて、描画テストの描画特徴が、患者の認知機能（記銘力検査）や心身の状態（GHQ）にどのように関連しているかも検討することにした。

さらには長期にわたり描画によって追跡された症例について診療録、看護記録とを対応させて、描画特徴と患者の状態との関連も検討した。

3. 研究の方法

研究参加者は北関東に位置する単科の精神病院に入院し、10年以上経過した時点で検査が可能であった35名であった。33名は統合失調症患者であった。2名は非統合失調症患者で、それぞれアルコール関連障害とターナー症候群による精神障害と診断され入院中の患者である。

症例検討の患者は10年以上の描画データがあるものをあてた。

4. 研究成果

統合失調症患者と非統合失調症患者で描画特徴を比較してみると、当初は活動性、写

実性、整合性のいずれの得点も有意な差を示さないが、10年後になると、非統合失調症患者の描画では、統合失調症患者に比べ活動性が増加し、整合性が低下した。また統合失調症の描画についてみると、活動性は10年後に有意に低下したが、写実性、整合性は有意な変化を示さなかった。これに対し非統合失調症患者においては、10年後において活動性が増加し、整合性が低下している。

描画特徴の10年経過において活動性が低くなり、整合性が高くなるということは、静穏化の傾向が捉えられたことを暗示する。

描画特徴と記憶テストの結果との関連を調べたところ、活動性は、身近な物品の即時記憶が維持されることと関連し、写実性と整合性は、逆唱や計算といった課題が示唆するように、注意の集中を要する課題における機能の保持に関連していた。描画特徴と日本版GHQ30の下位カテゴリーの関係を調べたところ描画の活動性が高まることは不安の高まりや気分変調の高さに関連した。さらに写実性は身体症状の低さとも関連の傾向を示し、その一方で睡眠障害の高まりと関連していた。

こうした結果が示唆することは、静穏化が注意の集中の改善、即時記憶の維持、不安や気分変調がないことに関連していることである。

個々の症例についてみると、10年間の経過の中で、複数の描画をおこなっているものがある。ある症例（A）は入院以来外泊を繰り返すが、退院には至らないまま16年を病院で生活した。その間11枚の描画が得られ、それらは3つの時期に分けて考えることができた。第1期では樹木の全体が捉えられている描画が得られていた。第2期になると、実のみが描かれ、樹木の全体が描かれることがなかった。人間の描画の場合には、人物が

大きく描かれた。第3期では、描画の全体的構成はほとんど変化せず、類似したものとなるが、描かれた要素の詳細さについてみると、それは徐々に失われてゆく。こうした描画時期に対応したAの状態についてみると、第1期ではAは外泊を重ね、就職する希望を失っていない。しかし第2期になるとオーディションを受け歌手になる願望を実現しようと固執するといった誇大的な考えに支配される。しかしオーディションを受ける事を主治医に禁止されてから、第3期の描画が得られるようになり、徐々に外泊にも出なくなり、記銘力も低下していった。

症例Bは17年間入院していた。入院当初、興奮を暗示するように描画には用紙全体を使用した空間の歪み表現が認められた(図1)。入院が長期化すると描画に断片化がみられるようになり(図2)、改姓、社会的逸脱行動、足の骨折、身体的変調に対応したように描画に変化(図5、6)が認められた。

エラー! 編集中のフィールド コードからは、オブジェクトを作成できません。

症例のなかには、A、Bのように、最初は全体的な描画を描いていたものが、あるときから描画が断片化し、再び全体を描くようになるものがある。こうした描画の質の変化がおこったところでは、対応して状態像も大きく変化していたのである。

症例を検討してみると、描画に断片化がみられても、それは経過中に現れる特徴であることが理解され、改善指標としては、その断片化が空間構成のあるものへ変化するものが考えられ、増悪指標としては、断片化がみられ一時的に改善し空間構成が認められても、その空間構成が貧困化するものと考えられた。

本研究計画で目的とした心理検査によっ

て症例の継時的経過を調べる、ということに関しては、症例レベルでは可能になった。そして、描画特徴を数値化し、その得点の推移を図化する、という試みは、増悪指標、改善指標を探る手がかりが得られたと判断される。今後の展開に関しては、統合失調症のより長期の経過を調べることと、外来ないしはコミュニティで維持されている患者の長期経過についても調べるができるならば、統合失調症患者のより全体的な経過が明らかにされよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5件)

- ① 横田正夫・青木英美・小野健二・原淳子：統合失調症患者の描画における増悪過程の臨床心理学的検討。日本大学文理学部心理臨床センター紀要、第6巻第1号、17-31、2009、査読有
- ② 横田正夫：バウムテスト。小川俊樹編集「投影法の現在」、現代のエスプリ別冊、143-151、2008、査読無
- ③ 横田正夫：統合失調症患者の10年経過の臨床心理学的検討。日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要、第76号、119-132、2008、査読有
- ④ 横田正夫・服部卓・青木英美・湊崇暢・原淳子：長期入院の統合失調症患者の描画に現れるライフサイクル的なテーマの変遷。日本大学文理学部心理臨床センター紀要、5(1)、19-30、2008、査読有
- ⑤ 横田正夫・青木英美・森村建一・原淳子：慢性統合失調症の描画における家の象徴。日本大学文理学部心理臨床センター紀要、4(1)、17-31、2007、査読有

[学会発表] (計 2 件)

- ① 横田正夫・伊藤菜穂子・小澤和弘・青木英美：統合失調症患者の 10 年経過による描画特徴の変化についての検討. 日本心理学会第 72 回大会発表論文集、p.385、北海道大学、2008 年 9 月 20 日ポスター発表.
- ② 横田正夫・伊藤菜穂子・小澤和弘・青木英美：統合失調症患者の長期経過における描画特徴の変遷. 日本心理臨床学会第 27 回発表論文集、p. 451、つくば国際会議場他、2008 年 9 月 6 日ポスター発表.

[その他]

ホームページ

<http://www.psych.chs.nihon-u.ac.jp/yokota/top.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横田 正夫 (YOKOTA MASAO)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20240195

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし